



令和四年度

人文学部

学校推薦型選抜

小論文

注意事項

- 一 試験開始の合図があるまで、この表紙を開かないこと。
- 二 試験問題は三枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚である。
試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 四 解答はすべて解答用紙に記入すること。指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 五 配布された試験問題および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
3.11.24
富山大学

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

ためらいもなければ、含みも曲折もない、そんな単純な物言いが溢^{あふ}れている。思考を停止したまま、不満や不安の強度を単純に高めるだけの、そんな粗雑な物言いが。ワン・フレーズのイメージ語、それがひとびとの意識を攫^{さら}ってゆく。それは、ワン・フレーズで言い切られるものであるがゆえに、曲折もなければ否定による媒介もない。つまりは「極・単」(ごく単純)このうえない。たとえば「勝ち組・負け組」という物言い。「負け組」に向けられるあつけらかなとした嘲笑は、かつて二十歳の女性を「おばさん」と呼んだあの女子高校生の感覚を思い出させる。いずれすぐ自分もなる世代を唾棄^{だき}するというのは、つまりは自分自身を唾棄することにほかならない。それは、言葉というよりもむしろあまりに単純な羨望のナイーブな叫びであり、またそうでない自分をなじる悲鳴だと言える。そして、単純に強度を加えるだけというところに、細部のニュアンスや複雑なコンテクストへの配慮をあえてしないところに、何か深い苛^{いら}立ちを、あるいは暴力性の澱^{おり}を、つい感じてしまう。

屈折も否定による媒介もない思考には、他のひとびとの思いや感じ方への過剰な同調はあっても、奥行きはない。まわりから期待されている思考や感覚の型にすつと嵌^{はま}らないもの、あるいはそれから外れるものを認めつつ、それらとじっくり摺^すり合わせをおこなう、そうしたためがない。このことを、思考に肺活量が足りないと言いかえてもよい。

では、思考のその肺活量とは何か。それは、ますますわからないことに、わからないままつきあう思考の体力と言ってもよいし、あるいはすぐには解消されない葛藤の前でその葛藤にさらされつづける耐性と言ってもよい。

わたしは戦後生まれの第一の世代に属する者であるが、この世代は「受験戦争」なるものいやでも巻き込まれた最初の世代でもある。受験勉強はゲームみたいなもので、要領よく点数を稼いでできるだけ短い時間で済ませたほうがよいというふうに、わたしもこの「戦争」を受けとめていた。けれども、同級生たちが五十代になって企業や役所などでそれなりに責任のある立場に就くようになって思ったのは、受験勉強でついた頭の癖というのは存外しつこかつたなということだ。入学試験や模擬テストを受けるとき、試験問題がくばられるとまづはぱらぱら頁^{ページ}をめくって、やったことのある問題、かならず解ける問題を探し、次に見たこともない問題、何が問われているのかさえわからないという問題を見つけて捨て、それからまずかならず解けるその問題で最低点を稼いで、あと残りの時間は、グレーゾーンにある問題、つまりひよつとしたら解けるかもしれない問題に集中する。

けれどもこの方法を社会の現実に応用すればたいへんなことになる。変動期にある社会は、さまざまの構造的な問題を内蔵している。これまでの尺度では測れないような困難な問題である。そのような複雑な問題に直面したとき、まずはわかるところから対応するというのならまだしも、いま起こっている理解困難な問題、その本質がだれにもまだ見えていない問

題を、自分がこれまで、手に入れた理解の方式で無理やり解釈し、歪めてしまおうというのは最悪の対処の仕方であろう。

わかっているものだけで解釈するというこのことが、先に述べた「極・単な思考」を招きよせる。しかし、社会の複雑な現実を前にしてわたしたちが働かせるべき頭というのは、すぐにはわからないけれども大事なこと、それを見いだし、そしてそのことに、わからないまま正確に対処するということだ。

三つのまったく異なる場面を例にとって考えてみよう。

まず、政治的な思考について。政治的な判断はきわめて流動的で不確定な状況のなかでなされる。外交政策であれば、それぞれの思惑を測り、いくつかの可能性を想定して、それぞれに手を打つ。しかし、そうした対処したいが関係国の思惑を刺激し、事態はいっそう複雑になってくる。国内政策であれば、さしあたって不可欠の政策AとBがあるとして——たとえば景気刺激と構造改革という、相反する政策——、いずれを先にするかでAとBのそれぞれの政策としての実効性は大きく変じる。政策が置かれる状況じたいが大きく変化してしまうからである。だからAに先に手をつけるのか、Bを先に実行するのか、それを手遅れになることなく決定しなければならぬ。けれどもいずれが有効か、だれも見通せているわけではない。見通せないけれども決断しなければならぬのだ。つまり、結果がわからないまま、わからないことに正確に対応するということ、それが政治的思考には求められるのだ。

次に、ケアの思考について。病院で、ある患者がひじょうに深刻な病に陥ったとき、そしてどういう治療と看護の方針をとるかというときに、考えは立場によって大きく異なる。医師の立場、看護師の立場、病院のスタッフの立場、患者の家族の立場、そして何より患者本人の思いと、さまざまな思いや考えが錯綜する。そのうちだれかの意見をとれば、別のだれかが納得しない。つまりここには正解はない。一個の正解がないままスタッフたちは、猶予もなしに治療と看護の方針を決めなければならない。

最後に、アートの思考について。たとえば、制作中の画家には、自分が表現しようと思っ
ているものが何かよくわからない。描きたい、表現したいという衝動だけは明確にあるが、
描きたいそれが何であるかは自分でも掴めていない。けれども、ここはこの色でなくてはな
らない、あそこはこういう線でなければならぬという必然性は感じている。だから画面の
ある一色だけを別の色に置き換えれば全体が台無しになってしまう。これしかありえないと
いう必然性を追うなかで絵はやつと描き終わる。しかしその画業の意味を問われても答えよ
うがない。画家の元永定正もとながさだまささんは自分の作品について「これは何ですか？」と問われるとい
つも、「これはこれです」と答えるのだという。そういう意味では、曖昧なものを曖昧なまま
に正確に表現する、一箇所もゆるがせにしないで、正確に、これしかないという表現へとも
たらすこと、これが画家の力量である。

このように、政治、ケア、描画のいずれにおいても、いちばん大事なことは、すでにわか

っていることで勝負するのではなく、むしろわからないことのうちに重要なことが潜んでいて、そしてそのわからないもの、正解がないものに、わからないまま、正解がないまま、いかに正確に対処するかということなのである。そういう頭の使い方をしなければならぬのがわたしたちのリアルな社会であるのに、多くのひとはそれとは反対方向に殺到する。わかりやすい言葉、わかりやすい説明を求める。

だが大事なことは、困難な問題に直面したときに、すぐに結論を出さないで、問題が自分のなかで立体的に見えてくるまでいわば潜水しつづけるということなのだ。それが、知性に肺活量をつけるということだ。目の前にある二者択一、あるいは二項対立にさらされつづけること、対立を前にして考え込み、考えに考えてやがてその外へ出ること、それが思考の原型なのに、そうした対立をあらかじめ削除しておく、均ならしておくというのが、現代、ひとびとの思考の趨勢すうであるように思われてならない。

（鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい？—臨床哲学講座』筑摩書房 二〇一〇年）
一部改変（漢字にルビを振った）

問一 筆者の考えを二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 筆者の考えに対するあなた自身の考えを、八〇〇字以内で述べなさい。

見本

令和四年度 人文学部 学校推薦型選抜 小論文

解答用紙(二枚中二枚目)

問二

A large rectangular grid for writing answers. The grid is composed of 20 columns and 25 rows of small squares. At the bottom of the grid, there is a scale with numerical labels: 800, 700, 600, 500, 400, 300, 200, and 100. The grid is currently empty.

受験番号

800 700 600 500 400 300 200 100

見本

下書き用紙（解答用紙ではありません）

